

—足摺海底館 50周年に思う—

「広報とさしみず令和3年10月号〈No.576〉」の一面巻頭に足摺海底館50周年の記事が掲載されていた。昭和47年(1972)1月元旦にオープンされて来年元旦で実に50年の佳節を迎えることになる。足摺岬灯台とともに、土佐清水市のシンボルとして長く波風に耐え、竜串に立ち続ける海底館に親しみと、感謝の気持ちが湧いてくる。

* * * * *

今は亡き母に連れられ、足摺岬からバスに乗って竜串まで行き、この海底館に初めて入ったのは、小学校3年生の夏休みのことであった。初めて池内写真館で購入したカメラを携え、母とともに竜串一帯を散策した。海底館がオープンした後の昭和49年の夏のこと(母32歳、私9歳)である。「高知に行きたい」と自棄(やけ)きった私をなだめ、家計も精一杯でお金がなく、近場の竜串日帰り小旅行であった。しかし、子どもながらに楽しく、うれしいひとときであった。今では宝物のような思い出である。今から実に47年前のことである。

* * * * *

母と訪れた海底館に今度は、自分の子どもたちと入ることになる。今は25歳、23歳となった長男と長女。今から15~6年前の思い出である。当時、子どもたちは小学校低学年であった。このように親・子・孫3代にわたる家族と竜串の物語である。

今回は、本年度「市史編さん便り第1号」の「市史執筆のブレイクタイム(27)足摺宇和海国立公園指定と観光ブーム」で既に掲載済みであり、内容も大部分が重なるが、足摺海底館50周年を記念し、これが建設される前後の歴史について、その背景をもう一度まとめてみたい。(田村)



↑ 足摺海底館の近景(左)と遠望(右)

海底館建物は、川崎重工の東播磨工場で建造され、1000トンのクレーン船で吊り上げ、瀬戸内海・豊後水道を経て竜串まで輸送されてきた。

—足摺宇和海国立公園指定と観光ブーム—

昭和 30 年(1955)、足摺・宇和海一帯は、国定公園の指定を受けた。昭和 47 年(1972)、自然公園審議会により環境庁長官に国立公園指定と公園計画が答申された。国立公園への昇格が審議された。結果「四国西南海岸の景観、特に海中の亜熱帯景観は第一級である」と満場一致で国立公園に昇格が確定した。

* * * *

公園計画では、これまでの「竜串海中公園」「宇和海海中公園」に加えて大月町檜ノ浦と西泊の「檜西海中公園」、宿毛市の「沖ノ島海中公園」が新たに海中公園に指定された。足摺岬から宇和海に至る海域に愛媛県篠山を公園区域に加え、足摺・宇和海国立公園となった。

* * * *

この指定に伴い、当時の矢野川俊喜市長は「これから国民の保養の場として自然環境を保全しつつ観光客の皆様をいかに収容できるか、保全と開発を調整していきたい。その為にも国のリーダーシップに期待したい」旨を表明した。

国立公園昇格に伴い昭和 47 年 11 月から県西南部での民宿・旅館・ホテル等の建設計画の申請が増加した。11 月から 12 月 16 日までの約 1 か月弱で建設申請が 63 件に及んだ(高知県幡多事務所開発室)。これまでは月平均 1~2 件程度であったので急増したといえる。その中でも土佐清水市が最も多く、申請件数は 53 件であった。これ以降、土佐清水市域でも足摺岬や竜串等を中心にホテル・旅館・民宿等の建設ラッシュが始まり、多くの観光客が土佐清水市を訪れるようになった。

—海中公園竜串に海中展望塔が建つ—

海中展望塔は、昭和 47 年 1 月元旦にオープンした。建物は高知県観光開発公社が川崎重工に発注した。同社の東播磨工場で建造され、1000 トンのクレーン船で吊り上げ、瀬戸内海・豊後水道を経て竜串まで輸送されてきた。

* * * *

この展望塔建設に関わり、事前に開発公社は、地元との交渉に当たった。地元地区代表を含めた協議会の設置・工事によるカマス漁の影響が出た場合の補償・展望塔周辺での売店設置の許可等々 6 項目の「覚え書き」が交わされた。入館料は、大人 400 円、中高生 300 円、子ども 200 円、団体(30 名以上)は 1 割引であった(当時)。

* * * *

また、海中展望塔とセットで、観光開発と海洋学習を目的に総事業費 7 億円を投じて「足摺海洋館」が昭和 50 年(1975)5 月 2 日に完成・オープンした。足摺岬の灯台周辺と竜串のこれらの施設は、当時観光の大きな目玉となり、観光ブームが訪れる。ホテル・旅館・民宿が建設され、多くの観光客を呼び込むことができた。

足摺海底館では、50 周年に寄せた思い出の記念誌を作成するとのこと。思い出の写真を募集している(10 月 31 日〆切)。送り先: asea@a-sea.net 足摺海底館